



女子高生メイドと 穴奴隷女教師

松平龍樹
挿絵／英田舞

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第四章	第三章	第二章	第一章
穿たれた女教師	うつほ	コケツ	陥穽
.....
216	87	50	4

登場人物 Characters

加納 真菜美

(かのう まなみ)

私立明翔学園中等部勤務の国語教師。目鼻が整った顔立ち、艶やかな黒髪、観る人を惑わす肉感的な肢体を持つ二十五歳。透のクラスの担任。

間名瀬 透

(まなせ とおる)

中学入学したばかりで全国統一試験4位を取った秀才。富豪の息子。絶倫の精力を持つ。

園寺 くるみ

(そのでら くるみ)

透に仕える女子高生のメイド。アイドル顔負けの容姿に短い黒髪をしている。

「あああ……ッ！ イヤッ、イヤあッ！ イヤあああ……ッ！ やめてええ……ッ！」
 自分の肉体カラダが、いや、女性器が道具モノ扱いされて、真菜美は哭ないた。
 くちゅッ。

「はああッッ！」

ついに、透と真菜美の肉体カラダが触れ合った。具体的には透の男性器の先端が、真菜美の大陰唇ラヴィアと接触したのだ。

真菜美は全身をぶるぶる、がたがた、フルわせた。

「あああッ！ やめてッ、やめてッ！ やめてええ……ッ！」
 ぐぐッ。

真菜美の悲嘆を聞きながらB G M に、透は真菜美の肉体カラダ、太腿をかかえるようにして、腰を、おのが欲望を突き入れてきた――。

「ひいひいッッ！」

自分の秘部に、熱さを感じて『今から教え子に犯されるのだ』と悟った真菜美は、なぜ、くるみと呼ばれる、メイド少女があんなにも熱心に口舌奉仕クチゴトウヂしたのか、ようやく理解した。くるみは、自分の忠誠の対象である少年の性行為S E Xが円滑スムースに行なわれるように、少年の男性器を勃起させるだけ勃起させて固くさせる一方で、その男性器を唾液まみれにしたのだ。

ずらうんッ
 ！！

(そッ、そッ、そんなああッッ!!)

自分が人間扱いされていない、モノ扱いされているという認識が真菜美の胸に大きな影を落とす。

真菜美は叫んだ。

「お願いですッ!」

ぐちゅッ。

ハメ撮りしようとしていた少年の突き入れが止まった。また、真菜美の背後にいるくみからの押し出しも止まる。

「わッ、私には、婚約者^{フイアンセ}が。お付き合いしている男性がいるんですッ!」

真菜美は涙を交えて必死に訴えかけた。

「だから、だから、ヤメてくださいッ! アアア……ッ! いやああああ~~~~ッ
ッ!!」

真菜美の、必死の、涙の哀願にもかかわらず、透は途中から興味を失ったように、おのれの昂ぶりを突き入れていき、またくるみも、透が入れやすいように真菜美の肉体^{カラダ}を調整する。

ぐぐッ、ぐぐぐぐうう~~~~ッッ。

「ああッ! あああッ!」

ついに、少年のイチモツが分け入ってきた。

「きひいいッ！ ひいいい〜〜〜ッッ!!」

真菜美は金切り声混じりの悲鳴を噴き上げた。

少年のイチモツは、到底中学生のモノとは思えない、熱さと圧迫感を伴って真菜美の膣腔に沈みこんでくる。

「ああああッ、ヤメテッ！ やめてッ！ やめてええッ！ 私には、付き合っている男性がいるのッ！ 好きなヒトがいるんですう〜〜〜ッ！ だから、だからッ、ヤメテえええ〜〜〜ッ！ あああ……ッ、ヒドいいい〜〜〜ッッ!!」

ぐぢゅッ。ぐぢゅぢゅぢゅウッ。

真菜美が泣き叫ぶうちにも、透は突き入れてイッた――。

そして――。

ぐぢゅうぶぶぶぶッ。

「あぐウッ！」

がくがくがくンッ！ がくがくッ。

「あが……ッ！」

最も恐れていた感觸を味わわされて、真菜美は顔を跳ね上げ、アワを吹いた。滂沱の涙がアフレ、全身に気色の悪い、熱い汗がシブく――。とうとう真菜美は少年に最後まで突き入れられ、ハメられてしまったのだ。

真菜美は泣き叫んだ。

「や……ッ、や……ッ、『やめてッ』って、お願いしているのに……ッ。『お付き合いしている男性がいる』って言うているのいい……ッ」

ひぐッ、あぐあぐッ。ぐすぐすぐすんッ。

最後まで挿入されて、鼻を鳴らして、まるで赤ん坊のように泣きじゃくる女教師をあやすのではなく、突き放すように、メイド少女が真菜美の巨乳を揉む、というよりひねくりながら、解説する。

「一言いっておくわッ。貴女が誰と付き合っていようが、誰が好きであろうが、はたまた、結婚しようがしまいが、結婚していようがしまいが、子供がいようが、妊娠していようが、まあまったく関係ないのよ」

!!

冷酷極まる物言いに、真菜美は絶句させられる。真菜美は今まで生きてきて、こんなにもあからさまで、直接的な悪意を浴びたのは初めての経験だった。もしかしたら、これから先の生涯でもないかもしれない。

「貴女はアナ」

!!!

メイド少女がきつぱりと、そう、断言する。

「貴女はアナなのよ。偶然御主人様の近くにいた、具合が良さそうで、使い勝手の良さそうな、性欲処理のための、精液を排泄するアナにすぎないのよ」

!!!!

真菜美は言葉を失い、くるみの言い分を聞くしかなかった。

「別に御主人様の同級生でも良かったんだけど、日に三回——コレが、アナタのノルマよ——ハメるのに同級生じゃあ、時間や場所の制約が多すぎるけれど、センセイならそういったモノを作りやすいでしょう？ それに同級生じゃあ、後々、いろいろと面倒臭いコトになる可能性が高いしねえ。そのあたり、センセイは大人ですから斟酌してくださるだろう、って考えたの」

くすくすッ。くすくすくすりッ。

真菜美の背後にいるメイド美少女が、勝ち誇ったように嗤う。

「精々、センセイは、『愛する教え子たちを守ったのだ』とか『前途有望な少年のために我が身を捧げたのだ』とかいう、お涙頂戴の、安っぽいヒロイズムにでもひたり、ナルシーちゃんシていれば、どうお？」

くるみは悪意をさらに剥き出して、真菜美の巨乳にそぐわぬ、小さな乳首を引っ張り、つねくる。

ぎゅううううッッ。

「あうううッ！」

ぐぢよぐづづッ。

「ああ……ッ！」

条件反射的に顔をしかめ、身体を硬直させると、挿入されている少年の巨きすぎる肉茎ニスの存在をいやがうえにも思い知らされる。

「イヤああ……ッ！」

真菜美がむせび泣いていると、くるみはさらに真菜美の乳首をねじるようにひねくる。きゆうううッッ。

「くううう……ッ！」

「それに、御主人様が、このイヤらしい巨乳デカパイに興味を示されたからよ」

「あぐ……ッ！ あぐあぐ……ッッ！」

「ヒ……ッ、ヒ……ッ、非道ひどイ……ッ！ 非道ひどすぎるわ……ッ！」

真菜美の人間としての存在を否定し尽くす、言いようだった。女教師の嗚咽に心を動かされたのでもなく、言いすぎたと感じたのでもなく、くるみの口調が変わる。

「でも、心配しないで良いのよ。私も、アナタと同じ、御主人様のアナなんだもの。勿論、私の方が先輩なから、立てるところは立ててちょうだい。その代わり、いくらでも、アナとしての務めを教えてさしあげるから♡」

ぐぢゅぐぢゅッ。

メイド少女の話が終わったと判断したのか、透がゆるやかに腰を使い始める。

みちみちと、みちみちと真菜美の満腔が軋んだ。

真菜美の女性器をいっぱい埋め尽くした、教え子の男性器が動くたびに、真菜美の

肉壁はなぞられて、コスリ上げられ、尾骶骨から背筋を駆け抜けた甘酸っぱい感覚が頭の中で爆ぜる。

「あああ……ッ、イヤあああ……ッ！」

それははつきりと快感だった。

婚約者との交愛時には感じた経験コトのない甘美な感覚に女教師は声を放って哭ないた。

うふふふッッ、うふふふッッ。

メイド少女が嗤う。

「そんなふうに通っていられるのも今のうちだけよ。すぐに、すつごく、気持ちよくなつて、アナタも、御主人様のチンポなしでは生きていけないアナに、ドレイになつちやうんですからね♡」

「あああ……ッ、イヤッ！ イヤッ！ イヤアアああ……ッ！」

ずんずんッ、ずこずこッッ。

「あぐ……ッ！ あぐあぐ……ッ！」

くるみの主張は誇張ウツクシではなかった。

透は、真菜美の腔腔ウツクシの感触、反応を確かめ、感得すると、さらに巧みに腰を動かし、真菜美の性感を心地よく刺激してくる。

ずんずんッ、ぢゅこぢゅこッ、ずむずむ、ぢゅここッッ。

「ひい……ッ！ あああア……ッッ！」



全身が熱くなり、頭の奥が痺れ、背筋が温もり、子宮が切なく疼く。

それは、明瞭な、心ときめく感覚、快感だった。

真菜美は自分の秘裂が熱く、濡れ潤むのを感じていた。恋人とのSEXでも、自慰でも経験したことの無い、心地よさに女教師は戸惑いながらも引きずり込まれていった。

透は女教師のスベリがよくなってきたのにほくそ笑み、可憐なメイドと眼でうなずきあいながら、さらに抽送を深く、鋭くしていく。

ぢゅつくつ、ぢゅこぢゅごつ、ぢゅむぢゅむ、ずむずむつ。

「あぐ……ッ！ あぐあぐう……ッッ！」

真菜美は敗北を感じ取っていた。それほどまでに教え子が与えてくれる快楽は鮮烈で、キョーレッツだった。頭の中で飛び跳ねる、快感の火花に何も考えられなくなる真菜美の耳道に美少女メイドの呪いの言葉がこだまする。

「どう？ 私が言った通りでしょう？ でも、こんなモンじゃすまないんだからね♡」
うふふふふッ。

「今日は腰が又けるまで、御主人様にハメていただくからね。恐らく明日の太陽はさぞかし、黄色いコトでしょうね♡ ああ、それから」
くるみは思いついたように、補足する。

「後で、経口避妊薬、ピルを渡しますからね。飲んでおきなさいね。センセイだって、恋人以外の、生徒の子供を孕むのはイヤでしょう？ もっとも」

くるみは小首をかしげた。

その様子は、ゴスロリ調のメイド服とあいまって、可憐極まるものだった。しかし、その華の蕾のような唇から放たれる言葉は、女悪魔を連想させた。

「ニンシンしたところで、墮胎^{オドロ}してもらうだけなんだけれどね♡ ああッ、心配しないで。墮胎専門の腕の良いお医者さんを紹介してあげるから」

「ああ……ッ、イヤアア……ッッ！」

女教師が、おのが運命を悟り、悟らされて哭^なくうちにも、教え子の突き込みと、女の最奥でのこねくりは巧妙さを増してくる。

ずんずんッ。ぢゅこぢゅこッ。ずにゆずにゆずにゆぶッ。ぢゅこぢゅこッ。

「はああ……ッ！ イヤあッ！ イヤイヤッ！ イヤアア……ッッ！ ひッ！ ひ
いいい……ッッ！」

真菜美は生きてまま、快樂の地獄に、奈落に引きずり込まれていくような気がした。

「はい、真菜美は『口舌奉仕ならば、経験は有る』と左様に、申ししております」

「なるほどね。パイずりは初めてつてことか」

中学生が、自分の担当女教師の性技を論評する。

「熱心さは評価するし、技術もそれなりにあるが、経験値がまだまだ足りない、つていうところか」

「はッ、私の教育がいたらず、申し訳ございません」

「くるみの責任じゃないよ。時間もなかつたし、これなら上できだよ」

「はッ、恐れ入ります」

畏まる、年上のメイドに向かつて透が破顔する。

「それに、初経験、つていうのも初々しくつていいよ。それに、婚約者よりも先に経験できた、つていうのがたまらないな。後は早く経験を積むことだな」

「それなら」

と、くるみが陰険そうに囁う。

「真菜美に、休みの日には婚約者を使つて経験を積ませれば、いかがでしょうか？」

!!!!

年下で先輩である、女子高生メイドの提案に真菜美は慄然とした。しかし、そんな女教師の気持ちなど無視して教え子が首肯する。

「それはいい」

くるみもうなずく。

「それでは、左様取り計らいましょう」

くるみは真菜美に向き直り、低い声で尋ねた。

「聞こえた、真菜美？　これから、休みの日には婚約者を呼び出して、乳シゴキの訓練をするのよ？」

それは疑問の形を借りた、命令、強制に他ならなかった。

——!!!——

(ひ……ッ、ひ……ッ、ひどい……ッ！)

ぐぢゅぐぢゅぐづづッ、ちゅばちゅばちゅゆるぶッ！

真菜美は上半身全体を使った奉仕を続けながら、哭いた。婚約者を練習台にして、教え子に対する奉仕の経験を積ませようという、先輩であり、年下のメイドの提案に、真菜美は涙を禁じ得なかった。しかも、その練習は奉仕・献身の対象である、教え子の中の学生フィアンセの婚約者や恋人になるためではなく、メイド、ドレイ、いや、性欲の捌け口、排出先としてのアナになるための訓練なのだ！

(し……ッ、しかも……ッ！)

屈辱に真菜美の胸の内は慄えた。

(一番目ではなく、二番目……ッ！　しかも、ほぼ中学校限定……ッ)
婚約者や恋人など慮外もつてのほか。メイド以下、ドレイ未満。性欲を排出されるアナ。しかも、

二番目。そのために、教え子にとつて二番目の排泄孔、アナになるために、アナに、もらうために、自分を愛してくれている婚約者を練習台にする——。

幾重にもネジ曲がり、倒錯しきつた墮落感が真菜美の胸に突き刺さる。そんな年増の巨乳メイドの心を嘲弄するように、女子高生メイドが嘸フ。

「……もつとも、貴女の婚約者が（乳シゴキを）許してくれればだけれどね」
「それは問題ないさ」

この春中学校に進学したばかりの少年が安請け合ひする。

「男性なら、この巨乳を見たら誰でも、乳シゴキをシて欲しい、つて考えるさ。ましてや婚約までしているんだ。絶対に『乳シゴキをシて欲しい』つて考えているさ」

（うう……ッ、ひ……ッ、ひ……ッ、ひどい……ッ）

『真菜美の価値はその巨乳だけだ』

そう断言されたように、真菜美は感じた。そこで透はあわてたように口調をあらためた。しかし、それは、涙をこらえながら、胸と口を使う女教師に対してではなく、かたわらにいる女子高生に対してだった。

「……だからつて、くるみが豊胸手術を受けるコトはないんだからね。イギリスに行つたりして、幹細胞を使った美容整形手術なんかも受けたりしたらダメだよ」

「はい……」

恭しくと、不承不承の狭間で頭を下げる、くるみの首根に透は手を回し、押さえつけ

ながら、フリルをいっぱいにあしらった純白のブラウスの上から、発達途中の乳房をわしづかむ。そして揉む。

やわやわッ、やわやわッ。

「あ……ッ」

中学生の御主人様にいつでも可愛がつてもらえるように、また奉仕できるように、自らの判断で下着をつけていない、美少女メイドは、短い悲鳴をこぼし、身をよじる。透すかさず、くるみの首を抱き寄せ、その赤い花のような唇に接吻する。

ちゅッ。

「ん……ッ」

最愛の御主人様、男性からの思いがけない、突然の口づけ——しかも、優しく、甘やかな、くるみの心をトロカすような——にくるみは一瞬で、溺れた。

頭芯を痺れさせ、股間を疼かせるくるみに、中学生は断言する。

「くるみはボクのドレイだ。肉体も精神も、ボクの所有物だ。だから、どんな理由があろうと、たとえ、ボクを喜ばせようという気持ちからでも、勝手に整形したり、手術したり、するんじゃないぞ。ボクは今のくるみが気に入っているんだからな」

——！

くるみはあわてて目を見開き、目の前にいる中学生を見つめた。自分の担当である女教師に、上半身を使った奉仕をさせて、椅子にふんぞり返っている中学生の頬が赤ら

でいるかのように思われた。くるみの視線と、その意味するモノに気づいたように、透はさらに頬を赤らめながら、視線をはずし、代わりに、くるみの未熟な乳房をブラウス越しに揉みしだいた。

やわやわッ、やわやわッ。

「いいか、絶対、絶対にだぞ。絶対に、絶対にボクに勝手に整形したり、手術したりするんじゃないぞ」

「は……ッ、は……ッ、はひ……ッ！」

感激に声を詰まらせながら、くるみはうべなつた。

うなずいたひょうしに涙がこぼれる。その涙に誘われたように透は、またもや、くるみを抱き寄せ、唇を重ねた。

ちゅッ、ちゅちゅちゅちゅちゅッ。

(ああ……ッ)

くるみは年下の少年の口づけに全身を痺れさせながら、受けた。

(も……ッ、も……ッ、も……ッ、もう……ッ。もう……ッ、私……ッ、私……ッ、死んでもかまわない……ッ)

『——かなわない』

単なる接吻キスと愛撫アイズリ&フェラチオ、それに優しい言葉の一つに泣きむせぶ、年下の先輩メイドの姿一番目の地位を視界の端に認め、胸と口アイズリ&フェラチオを使いながら、真菜美はひとりごちた。真菜美がくるみの地位一番目の地位を

に取って代わる可能性がない訳ではないが、昨日、観せられ、記録させられた、二人の変態的な交合と、今日の午前中に施された調教、それに今の会話と口づけに、その可能性が限りなく0に近いコトを真菜美は思い知らされていた。

技術がどうの、経験が何、と言う前に、真菜美には決定的に、透に対する愛情や尊敬が足りないし、欠けているのだ。それらに基づいた二人の間には、真菜美でなくとも、誰もが割ってはいる事はできないであろう。これから先、どれだけ真菜美が誠心誠意、心を込めて、身を粉にして透に仕えようとも、上回ることはないのだと、真菜美は理解していた。せざるを得なかった。

(も……ッ、も……ッ、もう……ッ。もう、私は……ッ、この教え子のアナに……ッ。中学校専用のアナでしかないのね……ッ？ 婚約者の女性であるよりも前に、このコのアナ……ッ。しかも……ッ、二番目のアナにしかすぎないんだわ……ッ)

年下の先輩メイドとは全く違う理由で真菜美の目頭は熱くなり、涙がにじみ、一筋の流れとなつてこぼれる。

(し……ッ、し……ッ、しかも……ッ、しかも……ッ。そのコトに、ヨロコビを感じちゃっている……ッ。『嬉しい』と思つている……ッ)

(なんて……ッ、なんて……ッ、なんでええ……ッ!?)

真菜美は自分の肩の端からうなじや首筋が熱くなつてきているのを感じた。

(も……ッ、も……ッ、も……ッ、もう……ッ、おしまいだわ……ッ!)

途方もない墮落感、喪失感が真菜美を熱く包み込む。それはドン底の奈落到ちた者のみが許される感激、喜びであり、法悦だった。自分の惨めな境遇を受け入れた、伊達メガネをかけた女教師は、自分の教え子によりいつそう熱心に奉仕し始めた。

勃起した中学生の怒張の先端に口をかぶせたまま、頭を上下に揺すり、口全体、喉奥まで使ってシゴキあげる。

ぢゅぽぢゅぽッ、ぢゅぶぢゅぶッ。

そして、両手で寄せてきた胸の膨らみで、とても少年のモノとは思えない立派で遅しいイチモツを揉みこする。

にゅぐにゅぐッ、にゅぢゅづにゅづッ。

『そうそう』

一心不乱に乳房バイズリと口舌フエラを使った奉仕チオにふけりゆく女教師の脳裏に閃き、蘇ってくるのは、今日の午前中に、先輩の女子高生から男性器を形どった大人のオモチャを相手にさせられながら教えられた言葉だった。

『なんでもかんでも、一生懸命、ご奉仕バイズリ&フエラチオさしあげればいい、っていうモノじゃないんだからね』

『そんなのは押しつけ、好意の押し売りにすぎないのよ』

『大事なのは御主人様の反応よ。御主人様の反応をよく見て、感じて、判断するの』

『御主人様のオチンポが熱くなってきた、固くなってきた、っていうのを素肌に感じる

の』

びくんッ。

中学生のイチモツが真菜美の胸肌で跳ねた。

その動きに応じて、くるみの言葉が真菜美の脳裏に閃く。

『特に、御主人様のイチモツが、熱くなるだけ熱くなり、固くなるだけ固くなった後の、小さく痙攣するような動きには注意するのよ』

『それは御主人様が気持ちがいい、射精が近い証拠よ』

『その気持ちよかった箇所や状態で重点的に奉仕して、射精してもらおうのよ。思いつきりね♡』

「……んッ、……んッ、……んンンッ、……んンンうッ」

ちゅぱちゅぱッ、ちゅっぴちゅびッ、ちゅぷちゅぷッ。

真菜美は自分の上半身バイズリ&フェラチオを使った奉仕に没頭していった。今の真菜美にあるのは、この世のものとは思えない快楽への希求でもなく、また教え子の性欲処理道具Ⅱアナに堕ちてしまった悲哀でもなく、また、その惨め極まりない境遇を受け入れた、絶望へと繋がるヨロコビでもなく、中学生の御主人様に対する奉仕の気持ちだけだった。

「……んッ、……ンンんッ、……んンンッ、ふ……ッ。……んンンうッ」

ちゅぱちゅびッ、ちゅっぴちゅっぷッ、ちゅびちゅぱッ。

そしてその気持ち、奉仕の感情こそが、ドレイというかメイド、主人に仕え、奉仕す

る者にとつて最も大切な、本質なのだ。真菜美は自分でも知らないうちに、本物のドレイ、メイド、アナになろうとしていた。

「ううッ、スゴいや。これが初体験ハジメテだとは思えない」

透は片目をつぶり、くるみを見やつた。

その視線には驚きとともに、謝意「くるみ、ありがとう」、さらに賛辞「さすがはくるみ」の気持ちまで込められている。

「……はい」

くるみは、ためらいつつもうなずきながら、驚きを抑えきれずにいた。昨夜の狂態SMプレイと、午前中の調教・説諭、それについて先ほどの接吻と会話が最後の一撃になって、くるみの今の地位Ⅱ間名瀬透に最も近い異性Ⅱ透の一番目のアナを脅かすような気持ちを持つ事をあきらめさせるコトができた、と考えていたのにそうではない様子だった。

『うかうかしてられないわ』

『もつと気持ちを含めて、ご奉仕しなけりやあ、ダメね』

単に意地悪をして追放おいおとすするだけならできなくはないが、そんな行為マネをすると、愛する、聡明で繊細な少年の気持ちが離れていくだけだと知っている、女子高生メイドは気を引き締める。

一方の透にとつては、自分が通う中学校に勤める巨乳の美人教師と、近所でも評判の美少女高校生を自分に忠誠を誓うメイドに仕立て、妍けんを競わせる、というオトコの夢を、図らずも実現させた形になった。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!